

資 料 目 次

- 資料 1 既設の学部との関係（教育研究の柱となる分野のつながり）
- 資料 2 人文社会科学系が本来有している批判力・構想力・実践力を十分に引き出す構造
- 資料 3 プログラムの編成概念図
- 資料 4 留学生や社会人学生が学問的基礎を習得するための三つの取組み
- 資料 5 カリキュラムの両軸構造とプログラム構成による人材育成
- 資料 6 カリキュラムマップ
- 資料 7 海外経験選択科目について
- 資料 8 多文化社会学セミナーについて
- 資料 9 スケジュールマップ
- 資料 10 履修モデル
- 資料 11 平成 28 年度長崎大学 F D 研修一覧及び多文化社会学 F D 研修一覧
- 資料 12 平成 28 年度長崎大学事務系職員 S D 研修実施計画
- 資料 13 新たな人文社会科学系の大学院モデルによる教員も含めた人材の育成

既設の学部との関係（教育研究の柱となる分野のつながり）

学部

- 多文化社会学部
【1学科】多文化社会学科

グローバル社会コース

・グローバル化する世界に法学、政治学、経済学分野からアプローチする。

社会動態コース

・グローバル化する世界の社会と文化の変容に社会学、文化人類学、歴史学分野からアプローチする。

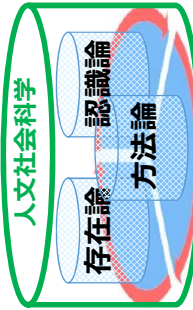
共生文化コース

・グローバル化する世界の文化的多様性に思想、文化、表象、メディア、言語分野からアプローチする。

オランダ特別コース

・グローバル化する世界をオランダの言語、歴史、文化、現代社会を通して理解する。

学問のエレメント (基盤必修科目群)



人文社会科学の概念や理論を、学問の土台基礎（存在論・認識論・方法論）に位置付け直し、各方法論の射程と限界を批判的に検討

多文化社会学の深化と修得

専門知の超域的活用の受け皿へと深化させ、方法論としての成熟化を図る。多文化社会学の修得を徹底化

徹底的な専門性の養成

大学院

- 多文化社会学研究科修士課程
【1専攻】多文化社会学専攻

学問のプラクティス

グローバル・スタディーズ科目群

・人文社会科学の見地から文化的他者への理解と共感に基づき、超域的に知と人を繋ぐことで、民族・宗教・文化・国家の摩擦や対立等にもみる存在や意味の多様性に対する否定・反動に対して、専門的解決を図っていく。

政策科学科目群

・既存の国際経済学（上からの視点）と地球上で生活する人々の視点（下からの視点）を調和した「世界政策論」を開拓し、政策・制度・規範と人間の安全保障に関わる問題等について専門的解決を図っていく。

環海日本長崎学・アジア研究科目群

・人文科学と社会科学の連携に基づく諸観点から、日本・アジアと世界の交叉・輻輳のなかで生じる歴史・文化・社会の問題について専門的解決を図っていく。

言語多様性科目群

・言語学の多様性を文法的・音声的特性、文化社会的規則や談話レベルの特性等から捉えることで、コミュニケーションの築き行為を通じた意味創出等、言語が現実構成の基盤にあることへの理解の欠如に関わる問題について専門的解決を図っていく。

核軍縮・不拡散科目群

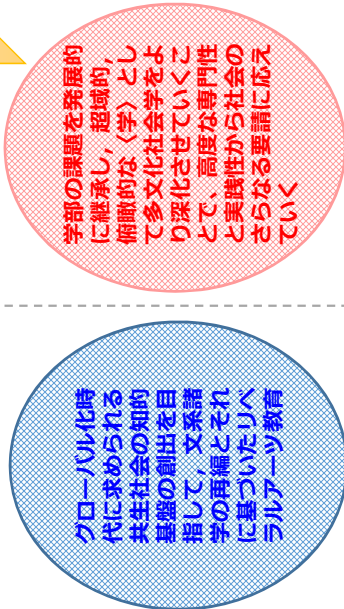
・核軍縮・不拡散分野において人文社会科学系と自然科学系及び研究と実務の両側面を兼ね備える（文理融合）ことで、人道・安全保障・経済等の問題について専門的解決を図っていく。

多文化社会学の基礎の修得

社会的・文化的・言語的多様性の視点から、既存の人文社会科学系の学問分野を横断的に再編することによって、新たな学びの領域としての「多文化社会学」を創り出す。
研究の柱を構成するのは、三つの基礎的学問分野である。

- ① 政治学、法学、経済学、経営学を基盤的分野とし、グローバル化時代における政治経済システムの特質を明らかにしていく分野
- ② 社会学、人類学、歴史学を基盤的分野とし、グローバル化時代における社会動態・社会変容の真相をフィールド調査に基づき明らかにしていく分野
- ③ 文化学、思想学、言語学を基盤的分野とし、グローバル化時代における人間と文化のあり方を、自己と他者の相互関係、自己認識と他者理解の相関関係を軸に明らかにしていく分野

多文化社会学の更なる深化へ 超域的かつ俯瞰的な〈学〉へ



多文化社会学の超域的・俯瞰的な深化

「学問のエレメント」において、人文社会科学の概念や理論を、学問の土台基礎（存在論・認識論・方法論）に位置付け直し、各方法論の射程と限界を批判的に検討するとともに、専門知の超域的活用の受け皿となる新たな方法論として多文化社会学のさらなる深化を図る。「学問のエレメント」では、「学問のエレメント」で修得した知識に基づき、社会、文化、政策、応用、地域、言語等の研究を通じて専門性を徹底的に養成する。
「学問のエレメント」と「学問のプラクティス」の相互補完的な連携・統合・展開を通じて、21世紀社会の諸問題の取組みで不可欠な、人文社会科学系が本来的に持つ「批判力」（現状への批判的反省力）、「構想力」（現状打破に向けた展望を提示する力）、「実践力」（領域横断的に知と人を繋ぎ、文化的他者との共生に基づき理念と利害を調整し、計画を実行する力）の三つの力を養成する。

人文社会科学系が本来有している批判力、構想力、実践力を十分に引き出すために

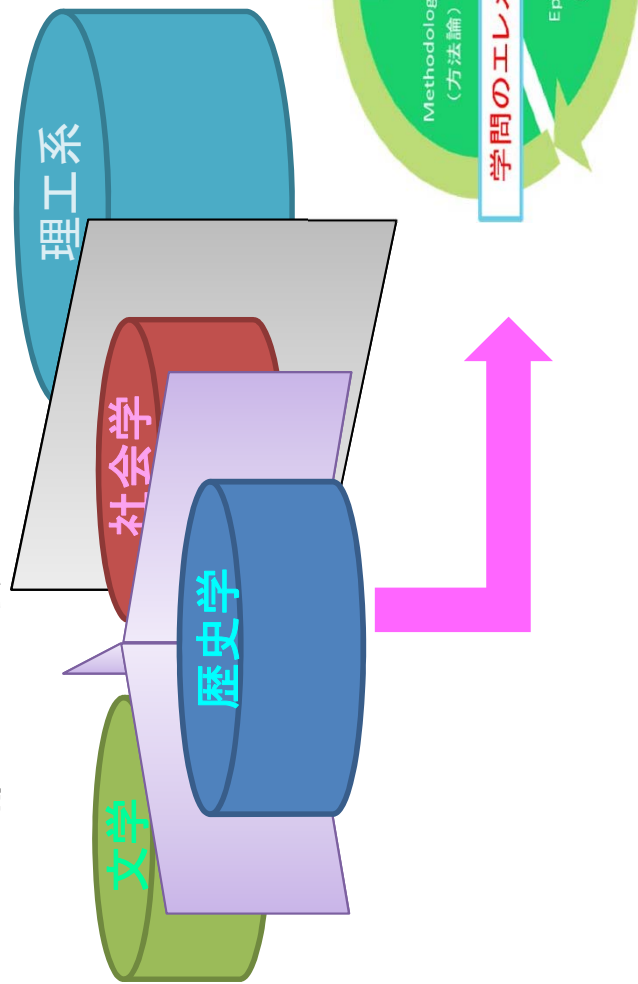
専門知の超域的な活用に必要な学問の土台的基礎

超域的に形成される21世紀社会の多文化社会的状況における諸問題へ対応するためには、人文社会科学のディシプリン（方法論）において、それぞれの専門知を構成する概念や理論を、改めて学問の土台的基礎（存在論・認識論・方法論）に位置づけ直し、そのことを通じて各方法論の概念と理論の射程と限界を批判的に検討、再構築を図る必要がある。その上で、21世紀社会の多文化社会的状況における諸問題の専門的解決を可能にするために、専門知の超域的活用を受け皿となる新たな学問的枠組みを構築する必要がある。

実践研究ゆえにむしろ必要な学問の土台的基礎

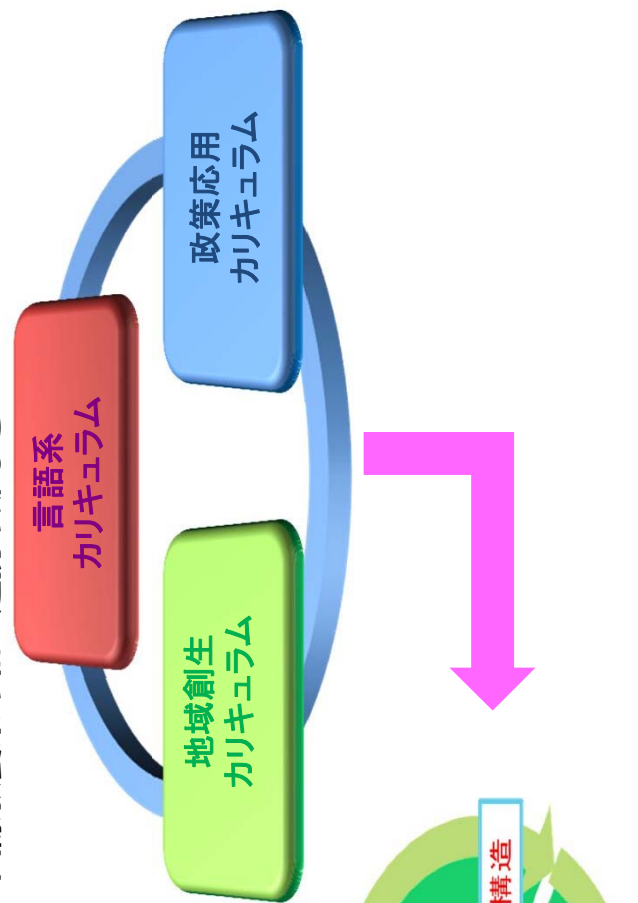
政策や応用等実践研究を中心とした学際的カリキュラムでは、目に見える成果を性急に求めることで、実践研究相互の有機的連関を失ってしまいうリスクが存在する。また、学問の土台的基礎（存在論・認識論・方法論）に基づいて物事の本質や他者の複雑性を見極めることは時間もコストも要することから、時代の風潮の中で、むしろ特定の価値や立場を無批判、無自覚に前提とした政策や応用に偏ってしまいうリスクも存在する。人文社会科学系が21世紀社会の多文化社会的状況における諸問題の専門的解決能力を発揮するためには、実践研究のカリキュラム相互の連関と、学問の土台的基礎による裏打ちが不可欠である。

例：文学部における社会学・歴史学・文学等



※学問のエレメントと乖離してしまうと、方法論(ディシプリン)も実践研究(インター・ディシプリン)も、その批判力、構想力、実践力を減退させてしまう

例：国際教養系の相互連携の難しさ



上記の例を「ディシプリンの過度の分業化」（左図）や「実践研究（インター・ディシプリン）にみる応用の偏重」（右図）と表現するならば、こうした問題を回避し、人文社会科学系が本来有している問題解決力（批判力・構想力・実践力）を十全に引き出すための工夫が必要である。本研究構想では、「学問のエレメント」と「学問のプラクティス」の両軸からなるカリキュラム構成をもって、この課題に応えるものである。

プログラムの編成概念図

学問のプラクティス

5つの科目群とそれを補完する
多文化社会学セミナーと選択科目群
＜ Global Studies Practice ＞

「学問のエレメンツ」で修得した多文化社会学の超域的かつ俯瞰的な体系知を通じて、社会、文化、政策、応用、地域、言語等を開かれた問題群のなかで研究し、多文化社会学の学問的な専門性をさらに深化させるとともに、多様な文化的他者や利害関係者の思想や行動を理解した上で、政策においても最善の解決策を提示できるような実践力を徹底的に養成する。

学生は選択外の科目群の科目も履修することができ、機動的に学びの枠組みを編成しうる開放的プログラムの構成となっている。

5つの科目群

- グローバル・スタディーズ科目群
- 政策科学科目群
- 環海日本長崎学・アジア研究科目群
- 言語多様性科目群
- 核軍縮・不拡散科目群

必修科目

多文化社会学セミナー

選択科目

- 海外経歴選択科目
- 東洋文庫選択科目
- 歴史民俗博物館選択科目

連携・統合・展開 (理論から応用いたるプロセス と双方の有機的な連携)

「学問のエレメンツ」と「学問のプラクティス」は再帰的な構造にあり、両者の間の学問上の「連携・統合・展開」(理論から応用いたるプロセスと双方の有機的な連携)を通じて、多文化社会学の深化が綿々と図られるとともに、そうした多文化社会学を修得することを通じて、21世紀社会の多文化社会的状況における諸問題の発見・説明・予測・解決で不可欠な、人文社会科学系が本来的に持つ「批判力」「構想力」「実践力」といった問題解決力を養成する。

学問のエレメンツ

基盤必修科目群

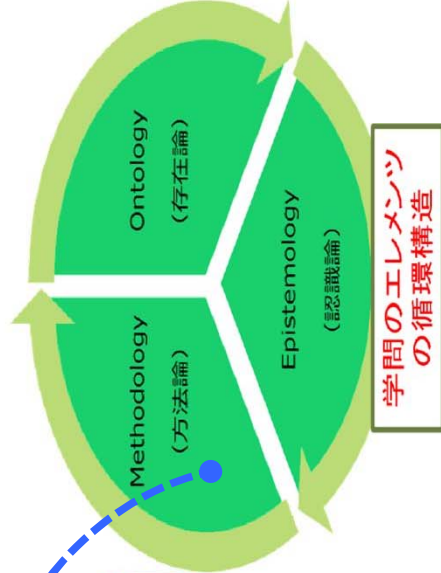
＜ Global Studies Elements ＞

人文社会科学の概念や理論を学問の土台的基礎(存在論・認識論・方法論)に位置付け直し、各方法論の概念と理論の射程と限界を批判的に検討するとともに、専門知の超域的活用を受け皿となる新たな方法論として多文化社会学の深化を図る。こうした多文化社会学の修得を通じて、「問題本質を見極める力」と「専門知の超域的活用のための力」が養成する。

学問のエレメンツⅢ・Ⅳ 《社会科学》

学問のエレメンツⅤ・Ⅵ 《Ⅰ～Ⅳの課題を継承・深化》

学問のエレメンツⅠ・Ⅱ 《人文科学》



【資料3】

学問のエレメンツ
の循環構造

留学生や社会人学生が学問的基礎を習得するための三つの取り組み

本研究科では、様々なバックグラウンドを有する学生（他大学卒業生，社会人学生，留学生）を想定している。そのため、通常の履修のスケジュールにおける①～③の取組みにより，学問的基礎を習得するための時間を確保している。

①「**少人数教育**」での対応
講義や演習における，少人数かつマンツーマン的で肌理の細かい教授法やディスカッションの採用



どうしよう…
難しい…



理解できた！



③「**多文化社会学セミナー**」による再サポート

2年次に受講する「多文化社会学セミナー」では指導教員以外からも研究指導を受けることができる。このセミナーを通じて，各学断するセミナーを通じて，各学生は自らの研究課題に応じた形で，学問的基礎をより確かなものとする事が可能。



②チュートリアル方式の「**学問的エレメンツ**」

1年次に受講する「学問的エレメンツ」6科目は講義と演習の併用（チュートリアル）で実施。講義後に演習を実施し，講義内容に即した議論や史料読解，プレゼンテーション等のアクティブラーニングを行い，講義内容の理解を徹底的にサポートする。
なお，必要に応じて，学部開講の専門教育科目を利用した補習授業（リメディアル教育）の受講や学部のCF（コーチャングフェロー）から，チュートリングを受けることが可能。



カリキュラムの両軸構造とプログラム構成による人材養成



2 1 世紀社会の多文化社会的状況における諸問題に対して、文化的他者への理解や共感を第一義に据えて多様な文化や社会、理念や利害を洞察し、自らが有する確かな専門知とともに異なる専門知をも横断的に繋ぎつつ、多文化社会科学の超域的かつ俯瞰的な見地から問題の発見・説明・予測・解決に取り組むことができる人材

人文社会科学系が本来持つ批判力・構想力・実践力を引き出す。

学問のエレメンツと学問のプラクティスの両軸構造

(学問のエレメンツとプラクティスの連携・統合・展開)

学問のプラクティス

グローバル・スタディーズ科目群、政策科学科目群、環海日本長崎学・アジア研究科目群、言語多様性科目群及び核軍縮・不拡散科目群により構成。学問のエレメンツにより培われた人文社会科学の土台的基础に基づき学問のプラクティスでは、多様な利害関係の立場を考慮しながら最善の解決策を提示する問題解決型の実践研究を深める。

○多文化社会学セミナー
科目群ごとに主選択や指導教員が分かれている学生が、科目群横断型の「多文化社会学セミナー」(必修)を共修することで、総合研究指導体制の下で領域横断的に研究指導を受けることができる。

学問のエレメンツ

人文社会科学に通底する学問の土台的基础(存在論・認識論・方法論)を学問のエレメンツにより学び、「問題本質を見極める力」と「専門知の超域的活用のための力」を徹底的に養成する。

5つの科目群

(2 1 世紀社会の多文化社会的状況における諸問題に対応した科目群構成)

学問のエレメンツと学問のプラクティスの両軸構造により、人文社会科学が本来的に持つ「批判力」(現状に対する批判的反省力)、「構想力」(現状打破に向けた展望を提示する力)、「実践力」(領域横断的に知と人を繋ぎ、文化的他者との共生に基づき理念と利害を調整し、計画を実行する力)といった問題解決力を涵養する。

学問のエレメンツにより専門知の超域的活用のための力を身に付けさせた上で、「グローバル・スタディーズ科目群、政策科学科目群、環海日本長崎学・アジア研究科目群、言語多様性科目群、核軍縮・不拡散科目群」の5つの科目群をメインにして、多文化社会学部でのリベラルアーツを重視した教育を、さらに発展継承した、領域を超えた専門性を養成する。

多文化社会学研究科カリキュラムマップ (案)

修了要件34単位

出口像

商社・食品・製造等の
グローバル企業、
フェアトレード現地生産者支援ス
タッフ(関連国際NGO)

編集者、記者、
社会問題・国際問題のアナリスト

文化財担当の地方公務員
(文化交流、世界遺産)、
発掘専門民間会社

文化的背景を持った教育者、通訳者、
教育分野における連続的かつ有機的
連携に対する、専門的なアドバイス及
びプログラム立案・実施に携わる人材

国際機関、政府、シンクタンク、NGO
等で世界のリーダーとなり、核軍
縮・不拡散問題の解決に取り組むこ
とのできる実践力を有した人材

主選択した科目群から
最低9単位
(講義6単位+演習3単位)
を履修する

自らの専門性に加えて、超域的に知と人を繋ぎつつ、理解と共生を第一に、問題の発見・説明・予測・解決に取り組む**多文化社会学**を身に付けた人材

研究指導(4)

主選択した科目群から 最低9単位 (講義6単位+演習3単位) を履修する	【必修科目】多文化社会学セミナー(2)
グローバル・スタディーズ科目群	【選択科目】東洋文庫選択科目 オリエンタルスタディーズ I (2)
政策科学科目群	【選択科目】海外経験選択科目 海外留学(2) 海外インターンシップ(2)
言語多様性科目群	【選択科目】歴史民俗博物館選択科目 総合資科学(2)
核軍縮・不拡散科目群	

<学問のプログラム> (18 単位)

グローバル・スタディーズ科目群

<身に付く力>
文化的他者への理解と共感に基づき、異質なものからアイデンティティを生み出す批判力・構想力・実践力
【解決を目指す主問題】
民族、宗教、文化、国家の摩擦や対立存在や意味の多様性に対する否定・反動

- 文化表象論特講(2)
- 文化表象論特講演習(1)
- 現代宗教論特講(2)
- 現代宗教論特講演習(1)
- ヨーロッパ社会史特講(1)
- ヨーロッパ社会史特講演習(1)
- アフリカ社会論特講(2)
- アフリカ社会論特講演習(1)
- グローバル社会と脱イデオロギズム特講(1)
- グローバル社会と脱イデオロギズム特講演習(1)
- グローバル・ヒストリー特講(2)
- グローバル・ヒストリー特講演習(1)
- カルチュラル・スタディーズ特講(2)
- カルチュラル・スタディーズ特講演習(1)
- East-West Studies 特講(2)
- East-West Studies 特講演習(1)

政策科学科目群

<身に付く力>
政策課題やその費用対効果、政策の適切な方法を学び、政策研究や政策分析を行う批判力・構想力・実践力
【解決を目指す主問題】
不均衡な資源分配に伴うリスク拡大政策、制度・規範と人間の安全保障

- 国際シグナチャー論特講(2)
- 国際シグナチャー論特講演習(1)
- 経済開発論特講(2)
- 経済開発論特講演習(1)
- 国際秩序論特講(2)
- 国際秩序論特講演習(1)
- 地域生態論特講(2)
- 地域生態論特講演習(1)
- トランスナショナル論特講(2)
- トランスナショナル論特講演習(1)
- 多文化家族研究特講(2)
- 多文化家族研究特講演習(1)
- 移民政策と家族・地域・教育特講(2)
- 移民政策と家族・地域・教育特講演習(1)

環海日本長崎学・アジア研究科目群

<身に付く力>
ローカルな文脈に分け入りつつ、普遍的次元で展開可能な方法と理論を構築するための批判力・構想力・実践力
【解決を目指す主問題】
日本、アジアと世界の交叉、輻輳の中で生じる歴史・文化・社会の問題

- 日本近世史・日蘭交流史特講(2)
- 日本近世史・日蘭交流史特講演習(1)
- 日本儒学・中国学特講(2)
- 日本儒学・中国学特講演習(1)
- 文化遺産論特講(2)
- 文化遺産論特講演習(1)
- 海城交流史特講(2)
- 海城交流史特講演習(1)
- 華僑・華人研究特講(2)
- 華僑・華人研究特講演習(1)
- 現代日本政治外交論特講(2)
- 現代日本政治外交論特講演習(1)
- 現代アジア社会論特講(2)
- 現代アジア社会論特講演習(1)

言語多様性科目群

<身に付く力>
言語学の諸分野における知見をもとに、言語の普遍性と個別性に対する理解を深化させ、様々な言語使用場面、コミュニケーション場面やレジスターに対応した表現の精選と英語プログラムの立案、実施、及び英語教育者に指導助言できる実践力
【解決を目指す主問題】
コミュニケーションの発語行為を通じた意味創出やルールの革新等、言語が現実構成の基盤にあることへの理解の欠如に関わる問題

- 言語学基礎研究特講a(2)
- 言語学基礎研究特講b(2)
- 英語学特講(2)
- 異文化化語用論特講(2)
- 第二言語習得研究特講(2)
- 談話分析特講(2)
- 英語統語論特講(2)
- 言語理論研究特講(2)
- 言語教育と第二言語習得特講(2)
- 言語学特講演習(1)
- 応用言語学特講演習(1)
- 日中対照言語学特講演習(1)
- 日英対照言語学特講演習(1)

核軍縮・不拡散科目群

<身に付く力>
核軍縮・不拡散分野において人文社会系と理工系および研究と実務の両側面を兼ね備えた実践力
【解決を目指す主問題】
核軍縮・不拡散が未完のプロジェクトであることと生じる人道、安全保障、経済面等の問題

- 核軍縮と国際政治特講(2)
- 核軍縮と国際政治特講演習(1)
- 原子力平和利用と核不拡散特講(2)
- 原子力平和利用と核不拡散特講演習(1)
- 核軍縮交渉の法と政治特講(2)
- 核軍縮交渉の法と政治特講演習(1)
- 核物質管理と核セキュリティ特講(2)
- 核物質管理と核セキュリティ特講演習(1)



<学問のエレメンツ> (12単位)

学問のエレメンツ I (講義・演習)(2) 学問のエレメンツ II (講義・演習)(2) 学問のエレメンツ III (講義・演習)(2) 学問のエレメンツ IV (講義・演習)(2)

人文社会科学の専門知を構成する概念や理論を、改めて学問の土台の基礎(存在論・認識論・方法論)に位置づけ直し、各方法論(ディシプリン)の概念と理論の射程と限界を批判的に検討、再構築を図る。

基礎必修科目群

「学問のプラクティス」と相互補完的に連携・統合・展開していくための基礎構築

多文化社会的状況における諸問題を俯瞰的に捉え専門的解決を可能にするための、専門的超域的活用の受け皿となる新たな学問的枠組みを探索する。

学問のエレメンツ V (講義・演習)(2) 学問のエレメンツ VI (講義・演習)(2)

入口像

人文社会科学系の学部卒業生、外国語学部・国際系学部卒業生、理系学部・大学院卒業生、東アジア・東南アジアの留学生、環海日本長崎学・アジア研究に関心のある社会人、高度実践力を伴う専門的職業人を目指す一般社会人

学問のプラクティスの特色～多文化社会学セミナー～

👉 多文化社会学セミナー（必修2単位）

〈学問のプラクティス〉のプログラム・科目群は、機動的に学びの枠組みを編成する開放的プログラムとして構成され、その実践的総括は、**必修科目「多文化社会学セミナー」**を通じて実施する。

「多文化社会学セミナー」では〈学問のイレメンツ〉で学んだ専門知、技法、領域横断的枠組みの土台の上で、多文化社会的状況における諸問題の実践的解決法の習得に向けて、ケーススタディ、ディスカッション、レクチャー、ネットワーキングペーパーティを領域横断的に実施する。

【ケースメソッド（ディスカッション・スタイル）の例】

「宗教に関わる多文化社会的状況とその諸問題の解決に向けて」

宗教対立／紛争、原理主義、テロリズムについて、領域横断的に学生と教員がディスカッション

論点の整理：グローバル化の進展する現代世界のある側面（負の側面）を反映

- ◆ 移民：人の移動による異なる価値観の接触
- ◆ 貧困：世界規模で進展する経済格差
- ◆ つながりの喪失とマイノリティの孤立
- ◆ アイデンティティのゆらぎ
- ◆ 拒絶反応としての排外主義

過激な宗教的表現へ

👉 『現代世界特有のリスクを回避しながら、社会がいかに持続可能か』という普遍的かつ喫緊の課題を明確化する

◎ 主に中東やヨーロッパで顕在化している宗教的問題は「どこでも起こりうる」

◎ 自然災害のリスクにも適用可能（東日本震災の例）

〈学問のイレメンツ〉の成果に基づきつつ、〈学問のプラクティス〉を統合・展開していく——研究の総括に向けて

各専門知を横断する存在論・認識論への再理め込みと、分野横断的な包括的枠組みの新たな構築を通じて、ケースメソッドに参加した教員や学生が、グループワークなどを通して、それぞれの解決方法を提言

特定の指標（宗教、民族、経済、政治、教育、…）による定量的および定性的な分析の統合

対象の「部分」と「全体」を包括的に捉える視座の明確化（現地の歴史的要因とグローバルな要因の交錯する場として）

政策研究（policy study）や政策分析（policy analysis）を通じて、政策課題やその費用対効果、政策の適切な方法を議論

**領域を横断して指導を受けることができる総合研究指導体制、PDCAに基づく明確な里程碑の設定
全学生を対象にして、修士論文執筆に向けた研究の質保証を徹底**

学問のプラクティスの特色～海外経験選択科目～

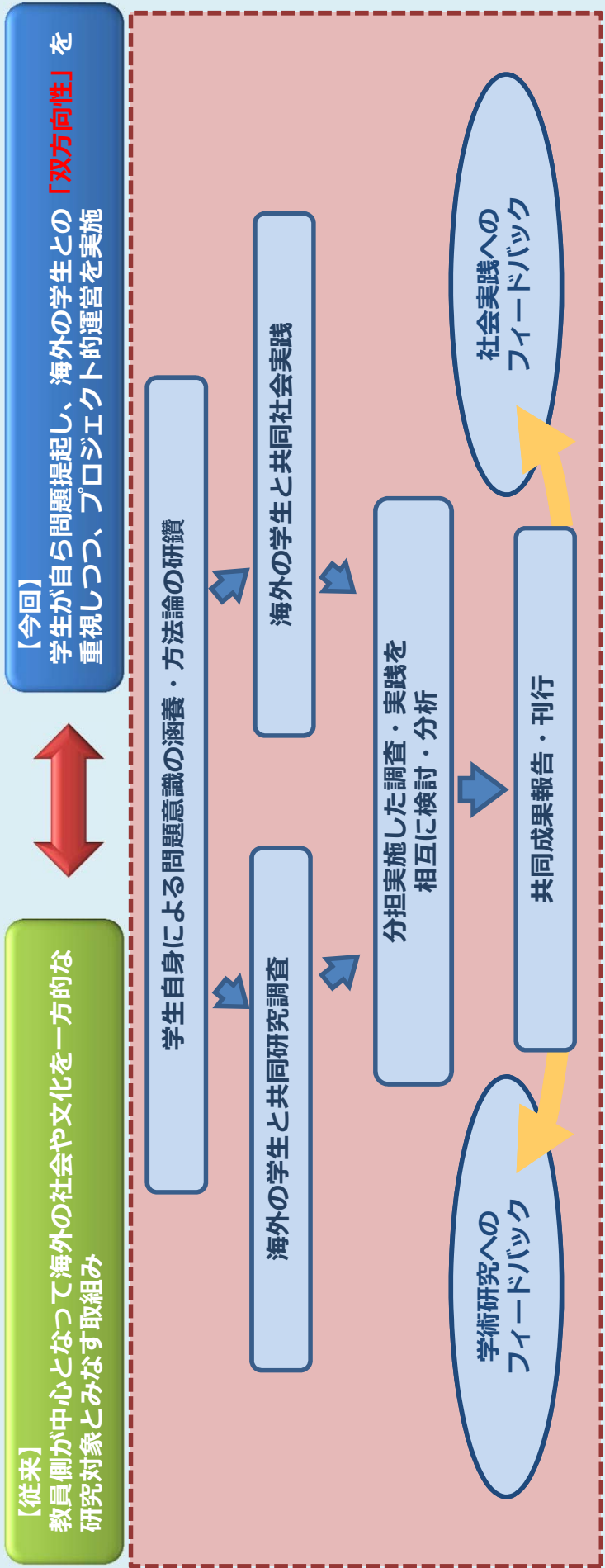
グローバルな視野を獲得させるための海外経験の奨励

文化的言語的他者とのコンタクトやインタラクティブを通して、卓越した語学力や情報収集分析力、多様性や環境への深い認識と文化や他者への深い共感を学ぶ。

【主な海外留学・フィールドワーク拠点校】

- ・西北大学 (中国)
- ・国立台湾大学 (台湾)
- ・東国大学校 (韓国)
- ・テイラーズ大学 (マレーシア)
- ・フィリピン大学 (フィリピン)
- ・ビクトリア大学 (オーストラリア)
- ・カリフォルニア州立大学 (アメリカ)
- ・ウィニペグ大学 (カナダ)
- ・マンチェスター・メトロポリタン大学 (英国)
- ・マンハイム大学 (ドイツ)
- ・ライデン大学 (オランダ)

具体的な内容 <海外フィールドワークによるアクティブラーニング>



1年次

第1クォーター
(4月上旬～6月上旬)

第2クォーター
(6月下旬～8月下旬)

夏季休業期間
(9月上旬～10月下旬)

第3クォーター
(11月上旬～1月上旬)

第4クォーター
(1月下旬～3月下旬)

2年次

学位の質を担保するための教育概要

学問のエレメンツⅠ～Ⅳ
 人文社会科学の専門知を構成する概念や理論を、改めて学問の土台的基礎(存在論・認識論・方法論)に位置づけ直し、各方法論(ディシプリン)の概念と理論の射程と限界を批判的に検討、再構築を図る。

学問のエレメンツⅤ～Ⅵ

多文化的状況における諸問題を俯瞰的に捉え、専門的解決を可能にするための、専門知の超域的活用の受け皿となる新たな学問的枠組みを探索し、「**問題本質を見極める力**」と「**専門知の超域的活用のための力**」を養成する。

学問のブラクラタイズ

「学問のエレメンツ」で修得した多文化社会学の超域的かつ俯瞰的な体系知を通じて、社会、文化、政策、応用、地域、言語等を開かれた問題群のなかで研究し、**多文化社会学の学問的な専門性をさらに深化させる**とともに、多様な文化的他者や利害関係者の思想や行動を理解した上で、**政策において最も善な解決策を提示**することができるよるような力を徹底的に養成する。
 また、「学問のエレメンツ」との同軸構造を通じて、人文社会科学系が本来的に持つ「**批判力**」(領域的批判的反省力)・「**構想力**」(現状打破に向けた展望を提示する力)・「**実践力**」(領域横断的に知と人を繋ぎ、文化的他者との共生に基づき理念と利害を調整し、計画を実行する力)といった問題解決力を養成する。

東洋文庫選択科目 / 歴史民俗博物館選択科目 / 人文科学系と社会科学系の新たな連携モデルを、現地調査と資料研究の徹底化を通じて探求することが可能。
 東洋文庫選択科目は、博士後期課程へのブリッジ科目としての位置づけであり、順次性や体系性を担保するものである。

海外経験選択科目 / 多文化的状況での文化的言語的他者との豊富なコンタクトやインタラクションを通じて、卓越した語学力や情報収集分析力、多様性や環境への深い認識と文化や他者への深い共感を学ぶ。

多文化社会学セミナー / 領域を横断して指導を受けられることができる総合研究指導体制とPDCAに基づく明確な里程碑の下、全学生を対象にして、修士論文執筆の真保証を徹底する。

各科目群の開講科目

- 学問のエレメンツⅠ (講義・演習)
 学問のエレメンツⅡ (講義・演習)
 学問のエレメンツⅢ (講義・演習)
 学問のエレメンツⅣ (講義・演習)
- 学問のエレメンツⅤ (講義・演習)
 学問のエレメンツⅥ (講義・演習)

- グローバル・スタディーズ
 政策科学
 環海日本長崎学
 言語多様性
 核軍縮不拡散
- 文化表象論/現代宗教論/ヨーロッパ社会史/アフリカ社会論 / グローバル社会と脱オリエンタリズム/グローバル・ヒストリー等
 国際エンゲージメント/経済開発論/国際秩序論/地域生態論 / トランスナショナルイテリ論/多文化家族研究等
 日本近世史・日蘭交流史/文化遺産論/海城交流史/現代日本政治外交論 / 日本儒学・中国学/華僑・華人研究/現代アジア社会論
 言語学基礎研究/異文化語用論/談話分析/言語理論研究 / 応用言語特定制演習/日中対照言語特定制演習/日英対照言語特定制演習等
 核軍縮と国際政治/原子力平和利用と核不拡散 / 核軍縮交渉の法と政治/核物質管理と核セキュリティ
- オリエンタルスタディーズⅠ / オリエンタルスタディーズⅡ (総合資料学)
- 海外インターナショナルネットワーク/海外留学

多文化社会学ゼミナール

指導プロセス



指導教員
決定

研究計画書の作成



倫理審査

中間発表会

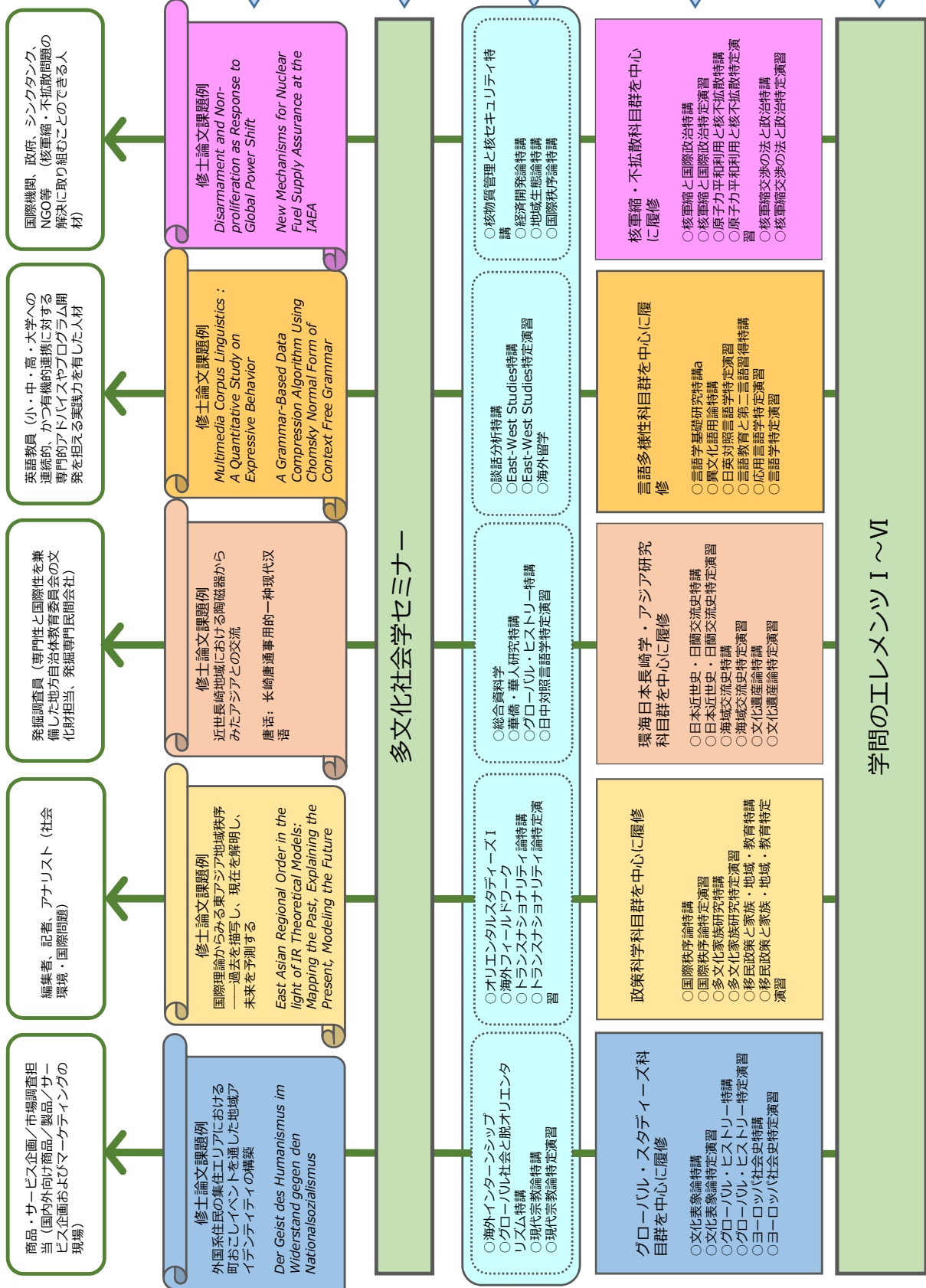


発表会

研究論文作成
審査

多文化社会学研究科 履修モデル

想定される
就職先・進路



必修科目 2単位

選択科目 7単位 (主選択した科目群または別の科目群、選択科目目から7単位)

必修: 9単位 (主選択した科目群から講義6単位、演習3単位)

必修科目 12単位

グローバリズム・スタディーズ科目群

政策科学科目群

言語多様性科目群

核軍縮・不拡散科目群

多文化社会学卒業生、その他の人文社会科学系の学部卒業生、理学部卒業生 (核軍縮・不拡散科目群)、留学生

日本語・英語・韓国語・仏語・中国語いずれかの言語による修士論文の執筆が可能。海外での就職や大学院進学等、本研究科修士生の多様なキャリアパスを支援

領域を横断して指導を受ける総合研究指導体制、PDCAに基づく明確な里程碑の設定、修士論文執筆に向けた研究の質保証の徹底

機動的に学びの枠組みを編成しうる開放系のプログラム

主選択した科目群を通じて、各自の研究課題に即した専門性を修得、修士論文執筆に向けた研究指導の連続的領域を構成

講義・演習一体型授業のユニークな方式により、人文社会科学の専門知識と新たな超域的知識の枠組みを徹底的に養成する

【資料10】

学問のフロンティア 学問のエッセンス

平成28年度長崎大学FD研修一覧

No	FD名称	研修目的	主催	実施時期
1	長崎大学新任教職員ガイダンス (ウエルカムFD・SD)	①長崎大学が目指す教育、研究等に関する基本的知識を得ること。 ②長崎大学にかかわる歴史を知ることにより、大学への理解を深めること。	教務委員会	4月
2	コミュニケーションセミナー ～アクティブラーニングのヒントを学ぶ～	ダイバーシティの考え方の基本となる「相手と自分が異なること」を理解したうえで、創造的に、また、双方にとって「WIN-WIN」となる解決策につながるコミュニケーションを実践的に学び、個人間のコミュニケーション力を高めるとともに、教員自らが体験的に学ぶことで自らの授業に活かせるアクティブラーニングのヒントを得、大学における教育および学内環境の改善に資することを目的としている。	ダイバーシティ推進センター	6月
3	FD・SDサマワーワークシヨップ	長崎大学での教養教育や学生支援等における課題を共有し、後期からの教育改善にすぐに役立てられるようする。	教務委員会	8月下旬 ～9月上旬
4	オンラインFD 『著作権入門～基礎編～』	教育現場におけるICT利活用が広がるにつれ、教育を目的とした利用であっても従来通りに著作物を利用できないケースが発生してきている。長崎大学でもLACSが普及する中、意図せずに著作権法に違反しないために著作権に対して正しく理解することを目的としている。	ICT基盤センター 附属図書館	7月～翌年3月
5	教育改革シンポジウム「クォーター制による教育改善」	クォーター制は、グローバル化に伴う学生の留学促進のためだけではなく、単位の質化や学習の深化といった教育改善の視点や教員の研究時間の確保など、様々な効果があるとされている。他大学の事例を通じて、長崎大学におけるクォーター制導入の参考とする。	教務委員会	8月下旬
6	「授業設計コンサルテーション」	セミナー・ワークシヨップなどの集合研修では、教員個人が抱える個別課題への対応まで行うことは、難しい。このFDは、個々の科目（授業）を対象としたコンサルテーションであり、シラバス・授業設計・授業方法などについて現状の課題を同定し、授業担当教員と共同で授業の改善案を考えていく。	教務委員会	8月～
7	「おおかた仕上がっている一年生へのキャリア教育」 ～学習と成長パラダイムも考慮して～	キャリア教育において先進的な取り組みを行っている京都大学より講師を招き、これまでのキャリア教育支援の内容を点検しつつ、今後のキャリア教育のあり方を学び、キャリア支援センターをはじめ各部署等におけるキャリア教育の改善等に繋げることを目的としている。	就職委員会	9月
8	教育改革シンポジウム『教学ビッグデータの活用に向けて ～Learning Analytics, Adaptive Learningについて考える～』	本シンポジウムでは、各大学で導入されている学習管理システム(LMS)の活用状況を紹介するとともに、学習管理システム(LMS)や教務情報システム(SIS)に蓄積された教育ビッグデータの活用に向けた国内外の取り組みを紹介し、学習管理システム(LMS)の新たな活用方法について考えることを目的としている。	ICT基盤センター	9月
9	モジュール科目のシラバス作成支援について	クォーター制への完全移行に伴い、「シラバス記載ガイドライン」に基づき全ての授業科目においてシラバスを作成する必要があるため、大学教育イノベーションセンターの教員による情報提供とシラバス作成支援を目的としている。	教務委員会	10月下旬 ～11月上旬
10	長崎大学メンタルヘルズ講演会	教員が学生の精神的な状況を把握することはもちろん、各教員の教育活動において、TEACHHサポートシステム及びコーチングの手法等を日頃から意識すること、また、メンタルヘルズに関する教職員全体の認識の向上にも繋げることを目的としている。	長崎大学学生相談支援等協議会 保健・医療推進センター 障がい学生支援室	12月

No	FD名称	研修目的	主催	実施時期
11	ICT基盤センター パソコンスキルアップ講座 ～Office 365 & 包括ライセンス入門～	本講座は学生および教職員のパソコンスキル向上を目的として、ICT基盤センターが開催する連続講座である。今回は「Office 365」と「マイクロソフト包括ライセンス」を取り上げる。	ICT基盤センター	12月
12	大学における自閉スペクトラム症への理解促進 ～一人の学生の体験から～	当事者である大学生の体験から、発達症を経験する学生への対応について考えるきっかけを提供し、全教職員の意識改革および教員の教育活動改善に寄与する、また、公開講演会にすることで社会全体の発達症に対する理解促進にもつなげる。	障がい学生支援室	2月
13	初習外国語教育のアクティブラーニングをともなった改善	現代ではグローバル化により、全世界的に多言語語を使用できる人材が望まれているが、日本では第2外国語の履修は減少傾向にあるため、初習外国語教育の目的を明確に伝え、その教育方法について改めて全員で考察する。	初習外国語小委員会 言語教育研究センター	2月
14	グローバル化に向けた英語授業展開のあり方について	特にSpeakingとWritingに焦点をあて、実際の授業風景をビデオで紹介することで実際の指導を体験してもらい、さまざまな意見を出し合うことで共有し、かつ議論を行い、今後の教養教育英語科目におけるさらなる英語教育の改善のための契機とする。	英語小委員会 言語教育研究センター	3月

多文化社会学部FD研修一覧（過去3年度）

No	FD名称	研修目的	主催	実施時期
1	「フィールドワークモジュールFD」（第1回）	使用教室、出欠管理、授業資料のあり方、講義ノートの共有、他の教員の授業参加、講義前後での教員間打合せ、フィールドワークの調査方法のあり方、シラバスのあり方、LACS活用の方法、FWに関するオフィスアワーの設定に関して意見交換を行った。	多文化社会学部（フィールドワーク入門科目責任者）	H26.7.25
2	「フィールドワークモジュールFD」（第2回）	授業の進捗状況、調査の方法と課題、教員間の連携、調査実習での連携、コーチングプロセスとの連携、報告書の執筆方法、今後の課題について意見交換をおこなった。	多文化社会学部（フィールドワーク基礎実習科目責任者）	H26.12.19
3	教養ゼミナールの改善に向けて	教養ゼミナールは学部のほぼすべての教員にとって担当可能性のある科目であり、学生たちにとっては、英語中心のTransition Programにあって、「フィールドワーク入門」と並んで専門科目の学修のために知的基礎体力を付ける科目である。今年度の担当者だけでなく、多くの教員で、教養ゼミナールの今後のあり方を検討する。	多文化社会学部教務委員会	H27.6.11
4	入試問題作成に関するFD	学力を構成する3要素として位置づけられているもののうち、「思考力・判断力・表現力」及び「主体性・多様性・協働性」に焦点を当てその評価方法についての理解を深めるとともに、その背景となる大学入試改革の議論の現状についての共通認識を持つことを目的とする。	大学教育イノベーションセンター	H27.9.25
5	初年次セミナーの実施に向けて	来年度より開始される「初年次セミナー」について、学部基礎としてだけでなく教養科目として全学モジュールの履修にスムーズにつながっていくような授業設計が求められているため、「初年次ゼミナーガイドライン」をもとに授業設計指針を共有するためのFD	多文化社会学部教務委員会	H28.2.10
6	入学試験問題作成等（主に面接）に関するFD	入学試験問題作成等（主に面接）に関する	多文化社会学部 大学教育イノベーションセンター	H28.7.21
7	就職活動に関するFD	外部講師を迎え、海外留学を終えた学生の就職事情や、企業における留学経験者の採用事情に関する講演を行った。	多文化社会学部就職委員会	H28.11.17

平成28年度長崎大学事務系職員SD研修実施計画

種別	No	研修等名	対象者	研修目的	実施時期	備考
実務層・若手職員研修	1	新採用職員研修	事務系新採用職員	新たに採用となった者に対し、長崎大学の職員としての使命と心構えを自覚させるとともに、大学職員として必要な職務遂行上の基礎知識、態度等を習得させることを目的とする。	4月	人事課 外部講師
	2	新採用職員フォローアップ研修	採用2年目の職員	採用後2年目を迎えるにあたって、これまでの自分の仕事の仕事を再確認し、これから2年目職員として仕事をすすめるにあたり、自己のコミュニケーション傾向を知り、困ったことへのコーピング法を学ぶ。	3月下旬予定	人事課 保健・医療推進センター カウンセラー
	3	若手職員ステップアップセミナー	事務系職員	若手職員を対象として、自らが日常抱えている疑問や課題を発言し合い、討議の中で分析を行い、その対応策及び解決策を導き出し、実践に移すことにより、業務に対するモチベーションと資質の向上を促し、長崎大学職員としての使命感の涵養と事務組織の活性化を図ることを目的とする。	9月	人事課 企画員（事務系職員）
自己啓発研修	4	放送大学利用職員研修	事務系職員等	職員に対し、幅広い知識を習得させ、もって職員の資質の向上を図ることを目的とする。	4月、10月	放送大学 長崎学習センター
	5	英語研修（初級・中級）	事務系職員	教育研究プロジェクト海外拠点への派遣及び国際学術交流関係事務部門への配置を視野に入れて、事務職員の英語力の向上を目的とする。	12月～3月	人事課 イーオン長崎校
SD研修	6	後輩の皆さんへ伝えたいこと	事務系職員	OJTフォローについて目標を決め、当該目標を人事評価記録書へ記載する。このことから、目標を着実に実行し、組織の活性化も狙いとす。	8月	人事課 SD研修応募者
	7	ココロとカラダに効く！～病院職員のための「健康」実践セミナー～	病院事務系職員	職員がストレスと上手に付き合えないながら、健康的かつ前向きに日々の業務に取り組むための知識・スキルの習得を目指す。	11月	人事課 SD研修応募者
	8	事務でつかえる！英コミュ研修 - 初級編 -	事務系職員	英語研修として、特に、留学生や外国人教員等への対応業務において実践的かつ効果的なコミュニケーションスキルを身につけることを目的として、実例を取り入れながら、実用的な文例や、英語での会話におけるコツ等を学習する。	8月～9月	人事課 SD研修応募者
	9	Yahoo!ニュースに学ぶ、読まれるニュースの書き方	事務系職員	ニュースソースを見つづけるためにどの様な視点を持つべきなのか、また分かりやすいニュースの書き方、伝え方のノウハウを学ぶため、ヤフーで長く広報を務められた方を講師として招へいし研修会を開催する。	11月	人事課 SD研修応募者

新たな人文社会科学系の大学院モデルによる教員も含めた人材の育成について

(学問のエレメンツにより教員のレベルアップの仕組みも構築できることの説明)

人文社会科学系が本来有している問題解決力(批判力・構想力・実践力)を十全に引き出すため、学問のエレメンツと学問のプラクティスによる両軸からなるカリキュラム構成をもって「ディシプリンの過度の分業化」や「実践研究に見る応用の偏重」といった問題に応える。

この両軸構成による教育は多文化社会的状況における諸問題に対して、多文化社会学の超域的かつ俯瞰的な見地から発見・説明・予測・解決に取り組みることのできる人材を養成しつつ、その一方で、教員に対して、自らが新しい領域にチャレンジしていく、自己の拠り所となっていた既存の学問のあり方を自己批判的に再検討することで、新しい学問的ベースを全員で考えていく。この意味で、「学問のエレメンツ」は、教員のFDの役割を果たすものとして期待される。

